

武芸の訓練の場 犬ノ馬場



新旭森林スポーツ公園の西方に広がる段丘上に、「御屋敷」と「犬ノ馬場」の地名が残っています。この地名から武士の生活の一端をうかがい知ることが出来ます。

「御屋敷」は、清水山城の城主であった佐々木越中氏の館跡と考えられ、これに接して「犬ノ馬場」の地域が広がっています。



明治6年 安養寺村絵図

明治時代の村絵図には、「犬ノ馬場」の地名とともに、1町四方（約100m四方）の土地が見られ、地元の方々の話によると、かつて、この周囲には土壘（土を盛った土手）や堀を見ることができました。現在、この区画の北西の隅に、近江源氏佐々木氏の氏神少名彦命を祀る大将軍社が鎮座します。

鎌倉時代以降、武士は武芸の訓練として、馬に乗って矢を射る訓練をしました。幼少時代から、馬の腹をはさむ訓練を受けるため、大腿骨が湾曲していたともいわれています。

この騎射の訓練の一つに、馬場に犬を放って標的にする「犬追物」がありました。この犬追物を行った馬場が「犬ノ馬場」です。一般的に、馬場は領主の館の正面に作られました。ちなみに「犬ノ馬場」の地名は、高島市周辺では、越前朝倉氏の一乗谷遺跡や近江守



大将軍社(本屋敷の鬼門に位置するとも伝えられる)

護の六角氏の観音寺城の城下町の石寺に残っています。また、観音寺城の本丸建物の障壁画には、犬追物の絵が使われていたとされ、現存する摸本（国会図書館蔵）から犬追物の様子を知ることが出来ます。馬場には、高さ1尺8寸（54cm）の太い縄で囲まれた土俵があり、犬が縄を飛び越え、スピードが落ちる一瞬をねらいました。しかし、ここで失敗すると、標的の犬も、追う馬も疾走することになります。

手綱を放したまま馬と弓を操作することは、至難の技で、矢の数よりも落馬する数の方が多かったことが、当時の文書にも記されています。

犬追物には、少なくとも150匹の犬が必要とされ、大規模な犬追物では千匹を使うことがあり、開催にあたり、多くのお金が必要とされました。一方、馬場には見物のため、はしごを使ってあがる棧敷が準備され、見物料（棧敷料）がとられました。

この棧敷料で経費が回収でき、興業収入も期待できたことから、武士は各地域に「犬ノ馬場」を設置し、頻繁に犬追物が開催されました。

犬追物の矢には、衝撃をやわらげる籐矢が使われましたが、傷つくと犬も多かったですとされています。

文化財課

☎(322) 4467

編集者のつぶやき

表紙は、道の駅つぎ新本陣で行われた東日本大震災復興祈念「つなごう・希望の灯り」のようす。復興を願うメッセージカードがついた約250個の風船が空に放たれました。またその後、夕方にはメッセージが書かれた300個の竹灯籠と高さ約3mの竹のモニュメントに火が灯されました。東日本大震災から1年が経過しました。被災地の復旧・復興には継続した支援が必要とされています。できることを続けていきましょう。(広報担当S)